哲学に未来はあるか?

ブルガリア哲学協会会長
イワン・カルチェフ

I. どのような意味で我々は哲学の未来について話すことができるか?

少なくとも四つの理由で哲学の発展は予測できないように思われる。

第一に、哲学史の経験をふりかえってみると、それは多くの点で、「偉大な哲学者たち」の思想の歴史として積み上げられてきたものであることがわかる。新しい偉大な思想家の到来を予測し、さらに、その人の哲学が動く方向を予測することは、ほとんど不可能である。彼が現れた後に、文化的社会的な状況との関係において、彼の思想に関する何らかの説明を見つけることはできるが、これは後になって過去の日付で書いたものであり、過去のみに向けられた理論の潜在可能性は極めて低い。[1]

第二に、哲学は科学である。科学は知識及び一般的に社会の精神的領域全体に影響する。しかし、知識自体は、自由な創造的活動の結果であり、予測するのは難しい。そのことはより高度な程度においてさえも、哲学に妥当するはずである。

第三に、一つまたはその他の科学理論とそれらが発展したものを反駁するのに用いられる多くの評価基準は、哲学については働かない。科学について妥当するような方法で、それを正しいとか偽りであるとかを確かめることはできない。その社会文化的な決定はその前兆的な可能性においてはそれぞれの限界をもたらすその時代の文化的な特殊性による決定に導かれる。

第四に、科学的知識の発展においては、累積的または飛躍的に、それぞれの動きについて語るべきより大きな理由があるが、哲学には科学的知識の発展に見られるという意味での進歩はないように思われる。

哲学においては一定の傾向と理論の決定は、歴史上、科学におけるよりもはるかに着実であり、かつ継続的に存在している。事実、哲学における進歩に関する問題は、科学と同様かまたは科学と矛盾する諸モデルの上にどの態度に築かれるかによって、様々に異なるタイプの哲学化において様々に異なるように知覚される。進歩または発展のアイデアは、哲学の傾向のそれぞれの発展段階と累積的アイデアを伴う科学知識の類推の上に築かれたシステムの中に出現するものである。今日、これは英米の哲学者のかなりの部分の典型である。そして、逆もまた同様に、新しい説明の導入と

してしばしば起こる文化モデルの上に築かれた非左右対称的、実存的、人類学的、解釈的な哲学において、我々は哲学における進歩の欠如の故に、また、あらゆる哲学理論を存在する権利を持つ産物として認めるが故に、また、トルストイの「戦争と平和」がホメロスの「イリアス」と比べて、進歩であるとは言えないのと同じように、ハーバマスの作品がアリストテレスの作品と比較して進歩であると言うことはできないという種類の議論の故に、期待に応えることができる。[2]

II. 哲学の未来の楽観的な概念

最近数十年間の魔法、宗教、および占星術の世界的な進歩は、哲学者がますます複雑で、変化し、危険な世界において、新しいパラダイムを創造することをしていないという事実に結びついている。しかし、それらの必要性は残っており、今後増加するであろう。我々は哲学の輝かしい未来を期待することができる。哲学の社会的な必要性は哲学の意義を増加させるであろう。哲学の輝かしい未来は、過去にあるのではなく、未来にある。そして、首尾よくそれを実現するためには、主として過去に集中するのを止め、問題の多い今日と未来の状況に目を向けるべきである。

この結論のための私の主要な議論は何か?

第一に、問題の多い哲学の分野（科学と文化の根本的な分析；現存する事物の状態の批判；肯定的または否定的なユートピアの確立）が保持されている。科学と文化は両方ともにそれらの内容を絶えず批判的に省察する必要性がある。そして、ある分野やその他の分野の活性化は、ある社会システムやその他の社会システムの根拠や意味や正当化に新しい意味を与えることを何度も要求する。そして、科学と文化の変化を含むすべての公共のプロセスの加速とともに、これらの機能は、より大きな重要性を達成する。新しい文化的社会的形態の創造が加速されるところでは、認識の根拠と人々の評価は過去にあった以上にしばしば変えられ、それはまた哲学的な活動の強化を要求する。

第二に、しかし同時に、哲学は、危機や増加するリスクの状態や、現在私たちが見ているような社会と個人の生活の複雑化の時に必要になる。それは長い期間にわずかに動くようなは社会においては必要ではない。社会がダイナミックである時、重要な社会変動が起こる時、その必要性が現れ、人間活動の新しい土台を発見するためにより強くなる。そして、今日、私たちは、巨大なリスクとグローバルな危機の深刻化の社会に生きている。このことすべてが理論的な考えと特に哲学の必要性を増加させている。

第三に、益々増加する学際的な相互作用が哲学の認識の発展における明確な傾向である。「認識に基づく社会」の建設は、増加する量の情報や解釈に関連し、世界の諸相を絶えず考え直す必要と繋がっている。それは哲学と宗教によってなす事が出来る。この意味で、哲学の社会的方法論的役割は増加する。それ以前の根拠を破壊し、哲学的な合理化を必要とする科学理論は絶えず生まれる。科学知識の加速した発展は諸変化の実物大の強力な哲学的な合理化がなければ不可能である。

哲学の特性としての学際性は素早くそして突然に増加する。哲学は増大する割合で異なった部門の知識と結びつき、それらの代表と共に、先に立つ質問の答えを探す。

第四に、増加する力学とすべてのプロセスの高い度合の不確実性は、未来の個人的および集合的な形の不確実性のために、社会的現実の「露出」感を強化するだろう。不確実性の原理は、かってハイゼンベルグが物理的現実の量子力学的記述に関して定義したものであるが、社会的な現実を特徴付ける原理に変わった。それは多数のタイプの可能な社会的現実を前提とし、それの発明と遊びが絶えざる任務となり、現代の時代の哲学の任務よりもはるかに複雑なものになり、比較的安定した思想的マトリックスの基盤に貢献する。 その中において社会のビジョンは左から右へ、そして異なる種類の保守主義から異なるタイプの社会主義や自由主義へと動く。これは、その部分としては様々なユートピアの哲学における活発な始まりの役割を強力に増やす。そしてそれは様々な形の実験哲学の進歩に栄養を与える。この意味で、哲学はミネルバの鳥のように、あるプロセスの終わりに来て、後方に向かうというヘーゲルの論文とは異なり、哲学はますます前を見て、社会科学の複合体とともに、異なる思想的、規範的、価値基盤を根拠として、可能な将来の役割を果たすであろうと思ってもよいだろう。しかし、不確実性があるところには、リスク現象も現れて、リスクとカタストロフィーの異なった代替案が哲学者たちの目の前に立ち上がらなければならない。

第五に、教育を受けた人々と都市に住んでいる人々のますます多くの数が増加することが常に、哲学的な問題への関心を増加させるための前提条件であってきた。
かくも多くの人々が都市に住み、教育と文化を発展させるそのような可能性を持つ事はこれまでの歴史にはなかった。それと同時に、不確実性の度合、彼らの人生の複数の選択肢、異なった選択の必要性、絶えざるリスクは、歴史上かってなかったことであり、今後もそのようであろう。かくも多くの人々は異なる程度の自由、強烈さや分岐点と結びついた動機構造の重荷を課され、これらの選択のための目印を探す必要性を増加させている自己の存在の露出と不確実性の状態に生きたことがない。これは多くの大衆にとって、個人的に哲学の心理学的な必要性の増進のための適切な栄養媒体である。

第六に、しかし、すべてのプロセスの高い度合の不確実性と露出は、これらのプロセスがどの方向に、又、どのように動いて行くかについて、哲学や哲学者に依存するであろうということを意味するものでは無い。この点において、哲学の能動的な始まりや世界を変える明確な方向性のための役割もまた、かなりの程度に哲学者自身に依存し、またどの程度に彼らが周りのプロセスや何が蓄えられているかについて哲学的に悟る現実の必要性に対してどの程度に反応することができるかという事実に依存するであろう。もし彼らが哲学の未来はその過去にあるというビジョンの虜（とりこ）のままでいるなら、すなわち、彼らが問題の多い明日の状況の分析にではなく、主に過去の哲学のテキストの理解にそのビジョンを減少させるだけならば、哲学者は単なる過去のスポークスマンのままにとどまり、現在の状況の意味ある分析者にはならないだろう。

我々が住んでいるようなますますダイナミックな世界では、可能性のあるものはその中に異なる方向性と多数の選択肢を含んでいるが故に、現実より豊かであるという考えがかってなく実感され得るものである。哲学と社会科学の両方が、異なった可能性を現実に変えるために助けるためにこれらの代替手段について議論して、提供するかもしれない。

将来の世界は哲学者だけに依存している訳では無い。我々をそこに追いやる力はそれらに対する哲学的熟慮よりもはるかに強力である。我々は、経済、政治、技術、宗教、その他のプロセスによって動かされており、それらの力は現代世界に生きている何万人もの哲学者のテキストよりも強力である。

彼らの専門的な社会は、地球上に住んでいる 60 億人以上の人間に比べると、相対的に小さい。そして、これにもかかわらず、哲学の未来はそれらに依存している。そして、変化する哲学は、いくらかのあるいはその他のプロセスが過ぎ去り行くことために役割を果たしてきたし、また果たしつつある。普通のときは、この役割は比較的弱いかもしれないが、変化と危機と不確実性の時代には、それは大きく、より強く成長して、我々が何処へどのようにいかなければならないかについての理性的な土台のビジョンおよび道具の主要な実体となるであろう。

今日の人類は、生態学的災害、地球温暖化、人口増大、エネルギー問題、食料、原料など数多くの地球規模の諸問題に直面している。これらの問題の基礎にあるのは科学技術の進歩である。

ここで生じる質問は、我々が選んだ道に従って我々は何処へ行こうとしているかである。このことは、科学技術の未来を合理化することを余儀なくする。なぜなら、新しい実績そのものではなく、その基盤の上に達成された技術複合体は、人類と地球に対する影響を予見しなかったかも知れないからである。存続するために人類は、技術の発展やこれらの発展の効果について明確なビジョンを持つべきである。[3]

啓蒙時代の哲学者たちの期待とは異なって、進歩は不可避ではない。しかし、それは、それが不可能であることを意味するものではない。しかし、この哲学の実行は哲学者に依存している。彼らが社会的な思考やビジョンのいかなる合理的な核を創造するかにかかっている。その周りに蓄えられているものの思考やそれを創造する諸活動が構築されるであろう。この意味で、 21 世紀がどのような世界になるかは、哲学と哲学者の両方に依存しているのである。

1. See Leaman, Oliver. The Future of Philosophy, London: Routledge, 1998, p.
2. See Leaman, Oliver. Op. cit. pp 3-5.
3. See Radulov, Georgi. Istoriya na tehnikata — evolyutsiya na tehnicheskite idei (History of technics — evolution of technical ideas). p.328.